

ふたたび、十二月の巻 おまけ

再会

アップダウンはあっても、高めで推移する分にはいい。だが、いくら何でも冬至にして最高気温二十度というのはどう考えればいいのだろう。気象の変異を誘つのは雨嵐系のあの女性の得意とするところだが、今日の変はいつもと違う。何やら理由がありそつだ。

「ま、魔女っ娘舞恵さんとしては、天気の一つ二つお手の物ヨ。今日は皆さんのために晴れにしたまで。ね、ハクン？」

「人生ハレの日にハレ女に転身つてとこスカね。ま、誰と言わずとも今日の好天は皆さんのおかげ。どーもありがとうございます！」

日曜日、つまり休館日なので貸切は可能。午前中の挙式を終え、お色直し等一段落した後にはセンターでパーティーという段取りだった。舞恵の性分からすればペアッと派手に行きそつなところだったが、不況の影響もあつてかわゆる地味婚な感じのプログラム。それでも賑々しく宴は進み、今は中開きの最中である。

「宝木夫妻？つて言っちゃつていいのかしら。ま、お二人が主役だけど、隅田夫妻の佳き日からも早いもんで明日でちょうど一カ月なのよね。とにかく新婚の皆さんおめでとっ！」
本人もいずれはおめでたいことになる筈なのだが、あえて伏せつっ、きっちり仕切っている。今やすっかり名司会者の文花である。

拍手が止んだところで、清、緑、寿の名物トリオは退席。いきいき環境計画関係者や ASSEMBLY のスポンサー各位もここまで。新婦勤務先の老若男女は何となく残っているが、目立つのは親衛隊の後輩連。新郎の職場も若いのが多いので、ここからは若手中心の忘年会、否、望年会となる。

ふ「で、弥生ちゃん、六月君で結局来ないの？」

や「さつさと宿題するとか何とか・・・まあ姉御が来るってことなら来たんでしょっけどネ」
さ「そついやシスターズ、午後から海外に行くとか言つてたような」

や「そつそつ確か韓国・・・」

とセンター三人娘が隣国の話で盛り上がっていると、どこか韓流な感じ、かつ誰彼に似た人物が早足でやつて来た。本多兄弟を見送つたばかりで出入口にいた新夫妻は呆然。さらに呆気にとられたのは同じく近くにいたそのそつくりさんである。

「おつといけね、置いてきちつた。コマ姉！」

千歳を見て動じるでもなく、来た道を振り返つて大声を出す。見慣れているけど初対面、誰を呼んでいるのか察しはつくも聞き慣れない名前。部分的だが会場は忽ち！と？とで満た

されることになる。

「ママ姉こと小松のお嬢さんがさつさと現れば話は早いのだが、階下でもたついている。太平はすでに外にいるが、業平が引き止めていたのだ。」

「小松つつあん、来たんだ。でも何かおつかれ？ ダイジョブ？」

「ええまあ、せっかく久々に皆に会えるってのにね。気を付けなげや。」

「向こうでのことか聞きたかったけど、何だか呼ぶ声が・・・誰？ さつきすれ違っただ人？」

「あ、ええ、またいずれ。じゃね。」

本日の温度上昇は南風のせいでもある。そんな風のように駆け上がっていく女性を見送りつつ、心なしか火照った感覚に陥る業平。移り気なのは今に始まったことではないが、ここところの新婚ラツシユでまた違った動揺が続いているようだ。

「弥生くん、最近おとなしくなっちゃったからな・・・でもなあ」

天気とは裏腹なブルー、これが今の彼の偽らざる心象である。

相応の喝采を受けながら、南実は照れくさそうに歩を進める。疲れを見せないようにしているせいか、どことなくきこちないが、えくぼは以前のままだ。

「すみません、皆さん。兄がお騒がせて・・・」

疑問符が払拭され、会場は一面の感嘆符状態。少人数ながら皆一様に嘆声や喚声を上げているので、南実は二の句を継げないでいる。

「私から紹介しようと思ったんだけど、何か話が通らなくて。やっぱり川一さん、よね？」

「センイチ？」ママ姉もそう言っただけで、オレってそつなん？」

どうやら話が長引きそつである。

南実が音信不通になってしまったのはこの数ヶ月のこと。Instagramから外れた訳ではなかったのだが、返事が来ないことには憶測がふくらむばかり。来日するのかしないのかもそつだが、尋ね人は見つかったのか否か、も一大事だった。返事代わりがこのいきなりのお出まし、超サプライズである。

島嶼部ではあっても米国は米国。研究室の通信環境を駆使すれば、尋ね人サイトなどを当たるのは造作ない。仕事の傍らではあったが、その搜索は手広く展開され、遂に実を結ぶに至る。プロフィールではヒットしなかったものの、顔写真が決め手となり、投稿を始めて半年ほど経ったある日、とある漁港関係者から連絡が入ったのだった。

「気付いたら船の中、ってのが本人の話。船員が言っには流木につかまっているところを

救出した、とか。でも名前も何も憶えてなくて・・・」

「で、そのまま消息不明になっちゃった、ってことかあ」

俄かにシリアスな話が交わされることとなるが、当人はそっちのけ。舞恵と会話に興じている。ブローケンゆえ、流暢と言っているのかどうか定かではないが、

「あの通り、英語はペラペラなんですけど、肝心の記憶が戻らない。で、とりあえず連れて帰って来れば、と。ドタバタ劇でしたが。」

「無事だった上に見つかっただから大したものよ。ねえ、櫻さん？」

文花はいつしか涙目になっていて、話もしづらそう。話を振られた櫻は、思いついたようにあることを訊ねる。

「記憶喪失？ とすると、本人だっという確証はどうやって？」

「何せ米国ですからね。DNA鑑定したの。一応。」

これには一同感心するやら感嘆するやら。その先の言葉が見つからない。さつきから黙って話を聞いていた弥生はこれでさらに沈黙を深め、囚らずも空気を重くしてしまうのだった。

「でもね、笑っちゃうのは結果が出ても信じてくれないってゆーか、私のことずっとカン違いしてるみたいで。妹だっって言ってもダメなんですよ。」

「恋人のつもりとか？ まさかね。」

「いえ、マジで襲われそうになっちゃって」

笑っていい場面ではなさそうだが、空気は換えておいた方がいい。と、再びご当人が声を上げる。

「おーい、コママ姉！」

「だ、だからやめてっば」

弥生もこれには思わず吹き出すしかなかった。

や「じゃあ、次はどうやって記憶を取り戻すか、かあ」

ふ「記憶を呼び戻せそうな場所に行ってみるとか、あるいは何かショックを与えるとか」

み「明日早速、川辺に行ってみるつもりなんですけど、どうも心許なくて」

南実はようやく千歳に視線を向けてみる。久々の再会なので、何となくときめくものもあるが、どうもそればかりではない。

「よければどなたか、いえ、やっぱりもう一人のお兄さんに、もちろん櫻さん、あと先輩

も・・・」

「川辺で襲われちゃシャレにならない、とか？」

「ま、それもあるけど、とにかくレスキュー要員、ですね。男性にいてもらった方が心強

い・・・」

櫻は冗談のつもりだったのだが、どうもそうでもないらしい。八広と話しながらも何となく聞き耳を立てていた千歳はここでようやく話に加わる。

「明日は定休日だから別に。ね、櫻さん？」

「おクルマに乗せてもらえるなら。ま、明日の調子次第、かな。」

調子云々というのが気になる面々もいるが、とりあえず詮索されずに済んだ。

「そつね、ドライブがてら行きますか」

日程調整も何もない。急遽持ち上がった話ながら、実にあっさり決まってしまう、一同に笑みがこぼれる。と、ここでまた新たな客が駆け込んできた。

「あ、おばちゃん！」

「だから、その呼び方やめてってば」

空港に迎えに行っていたため、午前中の式には顔を出せなかったが、午後は二人で来るはずだった蒼葉である。

弥生は絡みついでにすかさず問ってみる。

「んで、彼氏は？」

「アハハ、何せシャイなもんだから来てくれなくて。置いてきちゃった。」

挙式参列後、別件の取材に出て、このくらいの時間に戻ってくるはずだった冬木の姿が見えないが、顔なじみは揃った。ここで文花が再び音頭をとる。

「今年はいイこといろいろありました。忘れる訳にはいきませんので、忘年会とは言いま・・・・あ、ごめんなさい。忘れるだなんて。」

周りを見渡して、異変に気付く蒼葉。弥生が耳打ちするも釈然としない様子。

「では、小松川一さんの記憶が戻ることを祈る意味も込め、望む年の会と書いて望年会と致しましょう。来年もまたよろしく願いまーす！」

お祝いに駆けつけたつもりが、後回し。蒼葉は小松兄妹の前で一礼すると、一言二言話し始めた。

「見た目、千兄さんと似てるけど、性格的には？」

「センニイ？」

「あ、こっちの千歳兄さんのことです。私の義兄。」

「はあ、君にはこんな美人の妹がいるのか」

「だから義理の、ですよ」

「義理だったらいつか。オレもセンニイなんだし。どうだい、つきあわないか？」

弥生が毒づいたかどうか知らないが、ある意味、難破状態だった人物がナンパしている態である。笑い種になりそうだが、放っておく訳にはいかない。

「ダメよ、兄さん」

「ちゃんとステディがいるんだから。ネ？」

「こはコマ姉と櫻姉のお咎めでひとまず休止に。こんな時、彼氏がいてくれればと思いつつ、隠れるように千歳にしがみつくと蒼葉。頼りなさそうな義兄だが、一応頼れる存在なのであった。

* * * * *

当日見合いではあったが、調子が出ない日に当たってしまった櫻は家でおとなしくすることにした。仕事上、時にはこの組み合わせでクルマ外出することはあったが、ドライブというノリでは初めてである。向かった先に待っている件のせいもあるが、向かう最中も緊張感を覚える。文花と千歳は会話しているようなしていないような不思議な時間を過ごしていた。「結婚を第二のスタートって考えると、ありきたりの行事もまた新鮮味が出てきそうね。どう？」

「どっつって言われても。入籍は早めでしたけど、お披露目はその第二のスタートってことなら、まだここ一カ月ですからね。」

「明後日は夫婦で過ごす初めてのクリスマスですよ。ちゃんと考えとかないと。」

「ああ、それなら。東京タワーがおめでたいから行ってみようかって。」

「五十周年記念か。なるほどね。」

「おふみさんは？」

「今年はお兄さんとね。でも彼、出不精だからな。」

隣りを流れる川と同じく、いつしか会話は滑らかにになり、車中は笑い声で満たされるのだった。

長潮日なので、日中は水位高めだが、クリーンアップをする訳ではないので関係なし。曇りがちなから、気温は上々。川辺に出る条件としては悪くない。

「やあ、昨日はどうも。で、美人姉妹は？」

「また兄さんたらっ！」

文花もいるのにこの始末。だが、かつての川一を少しは知る身ゆえ、動じることはない。

「まあまあ、荒川に笑われちゃうワ。今日は兄妹仲良く、ネ。」

「ああこれが噂の荒川？　ここで昔、泳いだって？」

「ま、とにかく近くに行きましょ。」

河口近くにある造成干潟は、自然再生を模索中。まだじっくり行っていない観はあるが、長靴で歩く分には支障ない。とりあえず足元はお揃いの四人がそろそろと確かめるように歩を進める。

「川で泳いだって？ 本当に？」

千歳は信じられん、といった顔で南実に訊く。

「水練場つてのがかつては川のおちこちにあったんですってね。で、自発的に水練だあ、とか言っちゃって。私はただ眺めてましたけど。」

「名は体を現す、とは言っけどネ」

遊泳禁止にも関わらず、である。だが、体で覚えるということは何物にも代え難い教材になるのだ。離岸流にはひどい目に遭った訳だが、水に親しんでいたおかげで助かった、というのは一理ある。

記憶がないことも幸いしているが、水に対する恐怖症も特にならば連れてくるしかあるまい。だが、ちょっとした水に触れてもらえれば、という妹の期待以上のことを兄は仕掛けていた。

「ヤダ、気を付けてえ！」

干潟と川を隔てるように粗朶の堤が並んでいる。昔と変わらず無鉄砲な兄責はいつしかその堤の上において、果敢に水際に挑む恰好になっているんだから気が気でない。

「ハハツ、こりゃいいや、トト」

粗朶はそれなりに頑強にできているが、飛び移ってくる人物に対する備えは不完全。足を滑らせると、川一はあえなくバランスを崩し、大きな音とともに川の中へ。

「あぁっ！ 兄さん」

立ち上がれば平気な高さだったので事なきを得たが、南実と千歳に引き揚げられるようにして再び堤へ。

「レスキューってこのこと？」

「ええまあ。どうもすみませんでした。」

救助した側はこの通り軽口だが、救助された方はどうも様子がおかしい。体温を奪われているせいもあるが、足取りは重く、頭を抱えるようにしている。

「ひとまずくるまるもの持って来たけど、早く着替えた方が」

文花は駐車場へ誘導しようとするが、川一は干潟を上がったところで蹲ってしまった。これではお手上げだ。

「ウ、ウ・・・」

救急車を呼ぶか呼ぶまいかで悩んだのは一分ほど。その間もずっと川の水が彼の体を包ん

でいたことになる。が、この水の間、冷たさと懐かしさの入り混じったこの感じが、ある種の療法につながったようだ。

抱えていた手を解いて、しばらく天を仰ぎ、次に妹を見遣る。すると、

「ん？ み、南実、か？」

「そうよ、川一、兄さん！」

「オレ、どしたんだ？ 何でこんなところに？ ハッハッ・・・」

クシャミをしたら、その飛沫が南実の顔に。だが、濡れたのは兄のせいばかりではなかったように、

「ワー！」

あの気丈な南実が大泣き、つまり涙でびっしょり、になってしまっている。もう何に濡れようが構わない、そんな見事な泣き様。

「さあさあ、二人とも風邪ひいちゃうわよ。早くクルマに乗って。」

しばらく見守っていてもよかったのだが、早めのお節介を決断した文花は南実を抱き起すす静かに歩き出した。毛布とレジャーシートにくるまった奇抜な人物の方は、千歳が担当。傍目では兄弟が支えあって歩いているように見えるというのがまた泣かせる。

「南実ちゃん家、近所だからまだよかったわあ」

「とにかく早く着替えなきゃ、ね？」

川一は身震いしながらも、頻りに頷いている。助手席の千歳もただ黙って、女性二人の話しに耳を傾けるばかり。

「今日はまあお取り込み、ってところだろうから何だけど、皆が揃ったらまた改めて自己紹介しないとね」

「センターでクリスマス会、とかは？」

「まずは兄妹で過ごすクリスマスってのもいいんじゃない？」

「先輩は？ ああ、そうか。」

短い時間ながら、ドラマを地で行くような展開があったこの日。クリスマスには間に合いません。そうもないもの、兄が戻った今、新たなドラマを望みたくするのは女性であれば当然のこと。

「これで心置きなく恋路を踏み出せる、かな？」

小松南実、三十歳。兄に似た誰彼さんのことが気にならないと云えばウソになるが、新たな出会いの場をどこに求めるか、それを考えるのも悪くないと思うのだった。